The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	自然との別の関係を探して
Author(s)	紀平, 知樹
Citation	臨床哲学のメチエ. 2007, 16
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/9781
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

きた。そして、最後に行われた哲学カフェでは、同じ一日を過ごした人たちから出てくる意見の違いや、目の向け方の違いに驚いた。その違いはどこからくるのか、自然観察会はどこまで「作る」ことができるのか、そもそも「作って」よいのか、という疑問が出た。二度目は、そのような視点を持ちながら、主催者の立場を考えながら参加した。哲学カフェのタイミング、それまでの観察会の進行や内容などについて事前に検討を重ねた。当日の参加の仕方は初回と同じく“お客さん”だったが、他の人がどのように見ているか、どのように言葉にしているかについて注意しながら一日を過ごした。この時もやはり他の人の感覚や目のつけどころに刺激を受けつつ、内容や内容の方向性について議論を重ねることが大事であること、また、観察会中の会話について気を配ることがカフェの充実に繋がっていくのではないかということを感じた。

イベントとしての観察会の運営と、カフェの進行。目的を明確にしながら二つの要素を織り交ぜてうまく一つにまとめていくためにも、二度にわたって自然観察会を開催してみたことは大きな前進だったと思う。やってみる、考える、またやってみる、手探りすぎて進んでいるように見えなくても、意味がないように見えても、それが一番近道ではないかと思う。

自然との別の関係を探して

紀平　知樹

1　万博記念公園と自然観察

環境班では、７月９日に万博記念公園の自然学習の森を利用して自然観察会を行った。観察会当日は、薄曇りではあったが、しかし気温はかなり高く、蒸し暑さとたたかいながらの観察会ということになった。午後１時にモノレールの万博記念公園駅に集合し、午後４時頃までに自然学習の森を一周して、その後１時間ほど、自然観察会の体験をもとに参加者で議論を行った。

自然学習の森は、万博記念公園の西南の一角を占めており、その名の通り自然を学習できるような工夫がなされている。例えば、主要な樹木には名前の札がつけてあるが、その名前がすぐにはわからないように名前は隠されており、その植物がどのよう植物かを示唆するようなヒントが書かれている。それで、その森を歩きながら植物の名前をクイズ形式で覚えていくことができる。またソラード（森の空中観察路）という施設があり、それに昇れば、地上から樹木を見上げながら歩くのではなく、むしろ樹木を上から眺めながら歩くことができるようになっている[1]。

集まったメンバーは、誰もそれほど植物に詳しいわけではなく（わたしも昨年、あるNGO団体の主催する自然観察指導員の講

習会に参加したが、田舎育ちのわりには子どものころからそれほど自然が好きではなく花の香りなどをかいでも、心が休まるというよりは、どちらかといえばむせかえるという感じで、敬遠していた方である)、本当に自然観察会なるものが成立するのかどうか不安であった。

ここで少し自然観察会の理念についてふれておこう。ごくおおざっぱに言ってしまえば、自然観察会とは、自然と親しみ、自然とふれあいながら、自然を大切にする気持ちを育むための活動であるといえるだろう。ここでいう自然とは、希少な自然、手つかずの自然のみを指すのではなく、道端に生えている雑草や公園や校庭の花壇であってもいい。さらに自然観察会では、植物の名前や種類についての知識を増やすことが主な目的である必要はない。むしろ自然、生態系のつながりを感じ取ることの方が重要な課題かもしれない。つまり知識よりも感覚を重視するということである。

さて、しかしその点に問題があるのではないかというのが昨年度から引き続き行われているこの環境班の問題意識である。つまり自然観察会は、環境教育、自然保護を目指してはいるが、たんに自然を感じるだけで、そのまま自然を大切に思う気持ちが育まれるのだろうかという疑問である。あるいは、自然が好きであることと環境保護は直結するのかと言い換えてもいいかもしれない。例えば鬼頭

ソラード

秀一は、『自然保護を問いなおす』の中でエマソンやソローに言及しつつ、けっきょく彼らは都会人であり、都会人として失われていく自然に郷愁のような感慨をもつロマン主義ではないかという疑念を呈し、彼は独自の社会リンク論を展開し、切り身ではなく、普段の生活と環境問題とのつながりを重視しているが、自然を感じることに重点を置いた観察会は、ある種のロマン主義的な傾向をもってはいないだろうか。もちろん、いわゆる「自然」と切り離された都市に住む人間にとって、自然との接点を増やすことはそれなりに意味のあることではあろうが、しかしその反面、「自然」とはどこかに出かけることによって見いだされるものだという感覚が、さらには自らの足下の自然（環境）を見失うことにならないだろうか。このような問題点に対して環境班では、観察会終了後に対話を行うことによって、感じるということからさらに一歩先にすすめる（どこへ？）ことを考えた。

２　第１回自然観察会

話を観察会当日のことに戻そう。わたしたちは、自然学習の森をぶらぶら（本当にぶらぶら）歩きながら、通り抜けて、「花の丘」といわれる場所に出た。ここは、春には菜の花が、そして秋にはコスモスが一面に咲く小高い丘であるが、わたしたちが観察会を行った当日はほとんど何も咲いていなかったように思うが、ここで休憩をかねて簡単なスケッチを参加者にしてもらうことにした。ここでのスケッチは、いわゆるスケッチ、つまり木や草花を書くというスケッチではなく、音を描くというスケッチである。つまりその場所で聞こえてくる音をその音にふさわしい（それぞれ個人的に）線で表現してもらうというものである。このスケッチは、意外に評判がよかったようで、参加者全員黙々とスケッチに取り組んでいた。そしてそのスケッチが完成した後で、全員で自分の描いたスケッチを見せて、ごく簡単にその絵について説明をしてもらった。そうするとみんな聞いている音が違ったり、同じ音でも全く違う線で表現したりすることが明らかになり、参加者同士で自然とその違いがどういう違いなのかを確認しようとしていた。

スケッチが終わったあと、来た道をまた戻りつつ、観察会の最後のアクティビティである哲学カフェをする適当な場所を見つけて、そこでとりあえずこれまでの観察会を振り返りながら哲学カフェを行うことになった。「適当な場所」と書いたが、実際には特に日を遮るものもなく、夏の沈みかけた日を浴びながらの対話になってしまった。ふだん、これほど長時間歩くことなどめったにない私は、徐々に疲労してきており、身体に染みこんでくる残照と戦いながらの対話であった。

実際のカフェの詳細な内容は、各参加者の感想に譲ることにするが、他の参加者も疲労のためか、初めのうちは口が重かった。しかしその中でも「これまで見てきた自然は、ほんとうの自然なのか？」という問いが提出され、そこから「自然の怖さ」というテーマに話は進んでいった。後述する二回目の観察会の参加者の感想にもあるが、「ほんとうの自然」という問題は重要な問題であり、それほど活発に対話が行われたとはいえないが、それなりに収穫はあったのではないかと思う。ここで、この日の哲学カフェに関する問題点をいくつか挙げておくことにしよう。

・観察会でのアクティビティが、何を意図したものかはっきりしていなかった。
＊漠然とある手いるだけで、何をみせるのかがはっきりしていない。
・観察と対話との連続性が十分ではなかった。
＊これは、観察したことと対話の内容に連続性がなかったということではなく、むしろ、「はい、では哲学カフェをはじめます」というような感じで、対話を

はじめてしまい、観察から対話への頭の切換が参加者の中で十分ではなかったのではないかと思われる。

以上のような反省点を踏まえて、環境班ではさらに二回目の自然観察会を計画することになった。二回目の計画をすすめる中で、いくつかの問題点が浮上してきた。例えば、一回目の観察会の反省点として、観察会でのアクティビティの意図がはっきりしておらず、参加者にどのような自然をみせるのかが漠然としていたということを挙げたが、この点に関しては逆に、あまりにも開催する側が参加者の視点を縛るのはよくないのではないかという指摘があった。

自然の観察と哲学カフェとの関係を緊密なものにするには、観察の間に、カフェのテーマになりうるような経験をしてもらうということが考えられる。あるいは、カフェのテーマを先に設定しておいて、そのテーマに気づくような観察の仕方を考えるということもあるだろう。しかしこの環境班では、基本的にはそのようなやり方はとらないことにして、ある種の偶然性に観察会を委ねることになった。というのも、主催者側が、みせたい自然をみせるというやり方は、一方で確かにカフェでの議論に結びつけやすいが、しかし、それは結局参加者の視点を拘束し、参加者それぞれの感じ方の違いを消滅させてしまうことになりかねないし、そのことによって、対話そのものがある種の目的論的な、つまり結論ありきという性格を持ってしまうのではないかと思われたからである。また目的もなくぶらぶらと歩くということの中で、それぞれの参加者が何を見るのか、あるいは各人が勝手に見るものの中にこそ自然について多角的に考えるきっかけがあるのではないかという感想もあった。

しかしその反面で、自然観察会を偶然性に委ねるということは、場合によっては何を見て、何を議論したのかよくわからない一日になってしまう可能性もあるということは肝に銘じておかなければならないだろう。しかしそうならないためにも、視点を縛るというのとは別の仕方で、ある程度は何らかの仕掛けも必要ではないだろうかということが話し合われた。そして例えば、最終的に対話へとつなげるためには、観察の中で感じたことを、そのつど言葉にしていくことが重要なのではないかという意見があった。そして「オノマトペ」を用いるという案が浮上してきた。

またプログラムの組み方に関しても、この第一回目の観察会では、対話の時間を最後に設けたわけだが、私以外の参加者も同様に、疲労を感じていたようで、むしろ観察の途中で、休憩の意味合いも込めながら、対話を行う方がいいのではないかという意見も出された。そして最終的には、次のようなプログラムが組まれた。

・ぶらぶら歩きながら、道々にある樹木を視覚的に見た感じと、触ってみた感じとをそれぞれ擬音（擬態）語で表現してもらう。（これをしてもらう木は、前もって調査して、いくつかの候補を絞っていた）
・また、公園内の木のいくつかには、クイズ形式で木の名前をあてるような工夫がされており、そのクイズに挑戦してもらうような仕方で、参加者が観察だけでなく、言葉を発する機会を作ることにした。
・野鳥の森の中にある、観察小屋で冬鳥を観察する。
・同じく野鳥の森で、鳥の声や木々の音などを、線によってスケッチをし、その後各参加者に自分の描いたスケッチの説明をしてもらう。
・その後、公園内にある休憩所を利用して９０分程度の哲学カフェを行う。
・対話終了後、また散策しながらスタート地点に戻り、観察会終了。

以上のようなプログラムを立てて、当日の自然観察会に臨んだのだが、当日はあいにくの曇り模様であった。

３　第２回観察会

わたし自身は京都に住んでいるので、天候が微妙な場合、万博記念公園に比較的近い樫本、辻村のお二人に開催するかどうかの判断を任せることにした。当日の朝早く、樫本さんから、「小雨なのでやめようか」、という連絡が入るが、京都は確かに曇ってはいるものの、まだ降っておらず、またせっかくいろいろとみんなで考え、準備してきたことがもったいないという気持もあり、判断を任せたのにもかかわらず、決行を主張し、それを受け入れてもらい、開催することになった。樫本さんと私は、開催時刻より先に万博記念公園に向かい、その日に回るコースをもう一度前もって回っておき、どの木をみせるかということや、自然の音を聴く場所をどこにするかの最終決定を行なった。

参加メンバーが集まり、観察会がスタートしたが、天候は雨が降ってはいないものの、曇天で色づいていた木々の葉も少し濁ったような感じだった。前回の観察会と比べるなら、参加者は倍ぐらいになっており、ぶらぶら歩いていると先頭と最後尾の間にかなり距離があいてしまうことがあった。そのためかスタート当初は、どちらかといえば低調な雰囲気が漂っていたような気がしないでもない。しかし、途中の木々で観察してもらうために立ち止まることによって、必然的に参加者の物理的な距離は縮まり、また木の樹皮を見たり触ったりする中で、自分自身発見したことをしぜんに他の参加者に話しているようだった。先頭を歩いていた私はといえば、天候とプログラムの進行具合のことが気になり、少し足早になっていたような気がす

る。参加者に書いてもらったアンケートを見ても、やはりもう少しのんびりしたかったというような感想があった。しかし木の観察を始めたあたりから、やはり参加者同士の会話も少し増えてきたようで、相変わらず先頭と最後尾との距離は縮まらないが、しかし最初出発したときのようなよそよそしい距離感というよりは、むしろリラックスした距離感になっていたように思う。

ちょうど野鳥の森について、観察小屋に入ったあたりで雨が降り出してきた。まだ小降りで続行可能な状態だったので、そのまま野鳥の観察を少しして、そこから場所を少し移動して、森の音を聴いてスケッチを描いてもらうことにした。このスケッチの途中で雨が徐々に強くなってきたが、参加者全員それほど雨も気にせずに、耳を森の音に集中してスケッチを描いていた。約２０分ほどスケッチを描いていた方と思うが、そのうちに傘を差さずにはいられないほど雨が降ってきて、本来ならその場でみんなのスケッチを見ながら感想をいいあうということを考えていたのだが、急遽予定を変更して、哲学カフェで使用しようと考えていた屋根つきの休憩所に向かうことになった。

森の音のスケッチ

雨はいっこうにやむ気配をみせず、また雨に少し濡れたからか寒さも少し感じるようになってきたのだが、少し窮屈ながらも全員が屋根の中に入って、先ほど描いたスケッチについての説明をすることになった。今回のスケッチでは、音を線でかき分けるということをしてもらったので、まず参加者がいったい何種類ぐらいの音を聴いたのかということを最初に訊ねることにした。そうすると、やはり聴いた音の数もそれぞれで、いちばん少ない人と一番多い人とでは、倍ほどの違いがあった。そして数の少ない人から順番に、自分で描いたスケッチを提示しながら、どの線がなんの音を表現しているのかを説明してもらった。そうすると、きこえてきた音（参加者の感想にもあるように、その日は万博公園内で、他のイベントがあったり、隣のサッカー場ではＪリーグの試合をしており、その応援の音が聞こえてきていた）すべてを線に描いている人もいれば、いわゆる「自然」の音のみを描いている人もいた。

この違いは、「聞こえてくる音を線で表現する」というこちらの指示をどのように理解するかの違いであるといえるが、その背後にはさらに、「自然観察会」という活動において出された指示であるがゆえに、「自然の音」を描くと考えた人もいるだろう。しかし

もしそうだとするなら、そこには暗黙のうちに自然／非自然という区別が働いているのであり、聞こえてくるとの数を手がかりにして、自然とは何かを考えることもできるだろう。逆に、ほんとうに聞こえてくる音をすべて書き取っている人（例えば、人が歩く足音や、自分がスケッチをしているときにはしらせているペンの音を書く人もいた）は、文字通りすべてを描いているわけだが、そうだからといって、あらゆるものを自然と考えているかどうかはまた別の問題かもしれない。意外と、いわゆる自然の音だけを描いた人と、その人とが考える自然が同じことだってありうるだろう。

さて、一通り全員が自分のスケッチの説明を終えたあと、これまでの自然観察にもとづいた対話を行うことになった。今回の対話は、前回に比べればよく意見も出ていた。これにはいくかの要素が考えられるだろう。前回が疲労感と残暑との戦いだとするなら、今回は雨と寒さとの戦いだったのでコンディションの悪さという意味では同じようなものだろう。しかし今回はその雨のおかげで、コースを少し短縮したので前回ほどの疲労感がなかったということ、そして本来は別の場所でするはずだったスケッチの説明も、対話がはじまる直前に行うことになり、全員が一通り自分の言葉を話したあとで、そのまま対話に入っていくことができた。もちろん積極的に発言する参加者がいたということも挙げられる。この対話の詳細は、その様子の報告のページを見てもらうことにするが、テーマは「自然との一体化」ということが上がってきた。この問いもやはり、第一回目のテーマと同様に、「自然とは何か？」という問題に突き当たることになる。この会の予定では、カフェの時間は９０分ぐらいとっていたわけであるが、多くの参加者にとって観察会ははじめての体験ということもあり、またかなり雨がきつくなり風も吹いてきたので、ファシリテータの判断で、予定より早めに切り上げて、観察会を終了することになった。短い時間ではあったが、問いを立て、それを深めるということがある程度はできたのではないかと思われる。

以上、記憶をたどりながら二回の自然観察会の概要を書いてきたが、最後にこの二回の観察会の総括を行っておきたい。

４　自然観察の非日常性

参加者の感想のなかで、「自然観察会はフィクションなのではないか」ということがいわれていたが、この問題は環境班がエコツアーや自然観察会について調べたり、実際に参加したりする中で浮上してきたそれらの「非日常性」という問題と重なるだろう。最初にも述べたが、多くのエコツアーや観察会では、「自然とのふれあい」や「自然の中での体験」ということを謳っているが、そのような経験

が行き着く先については無頓着とまではいわないとしても、楽観視しすぎているのではないかと思われる。すなわち、自然と触れあうことによって、自然の大切さを知り、それが環境問題の解決につながると。このような連鎖が起こらないとはいわないが、しかしそれらの事柄は、そんなに簡単につながるものなのだろうか。たとえばある種のブームの中でエコツアーは順調にその集客力を伸ばしているように思われる。例えば、西表島では、エコツアーブームの裏側で、ツアー客の増加による自然破壊が深刻化してきている。わたし自身、ここ数年の間続けて西表島に行き、エコツアーに参加しているので、環境破壊の一端を担っているかもしれないので自戒の念をこめていうが、エコツアーに参加して楽しいのは、やはりふだん見慣れない景色、生き物、植物を見ることであり、それが必ずしも自分の身の回りの環境を保護する意識に直結するわけではないのではないだろうか。これは自然観察会でも同様ではないだろうか。どこかへ出かけることやふだんは見たり聴いたりすることのないものを見たり聴いたりするというのが、エコツアーや観察会の主要な部分を形成している。つまり「ふだんとは違う場所」、「ふだんとは違う見方」がこれらの活動の核にあるように思われる。

しかしあまりにもその部分に対する興味が優先されてしまうならば、それは単なる「見物」とそれほど代わりがないのではないだろうか。すなわち珍しい建物を見る、珍しい彫刻を見るということと珍しい自然を見るということの間に本質的に違いはないのではないだろうか。あるいは、「ふだんとは違う」ということへの興味は、「ふだん（日常／現実）」を覆い隠してしまうことになる可能性がないだろうか。すなわち遠いところにある珍しい自然は保護すべきであるが、自らの足下の自然への注意が薄れてしまうのではないか。しかしまた同時に、この非日常性やフィクションがなければ、こういった活動は成立しないのではないかとも思われる。だとすると、この非日常性やフィクションをなんのためにつくり出そうとしているのかという目的と、その目的にとってつくり出されたフィクションが十分かどうかということを常に考えていく必要があるだろう。その中心になるのがやはり「自然とは何か？」という問題である。

いまのところこの環境班で考えている自然観察会は、この問いを考えるための観察会だといえるであろう。この問いを考えるのに、万博記念公園はふさわしい場所かもしれない。というのも、その名の通りこの公園はもとは大阪万博の会場であり、その後に造営された人工的な自然である。しかしまた大阪という都市でこれほどまでに樹木がたくさんあり、容易に歩き回れる場所はそうないであろう。しかも「自然学習の森」や「野鳥の森」といった名称が付けられているように、観察会を助けるための工夫も随所に施さ

れている。もちろんこのような自然はほんとうの自然ではないということもできるだろうが、しかしそれではほんとうの自然とはなんなのだろうか。それらを分けるのはなんであろうか。一つの回答として考えられるのは、人手が入っているかどうかであるかもしれない。しかし地球温暖化という問題を考えてみた場合－それが人為的な影響によって引き起こされているとするなら－、間接的にではあれ、地球規模で人為的な影響が現れてきているのであり、そうであるなら人手の入っていない自然などないのかもしれない。また里山の場合のように、人手が入ることによって豊かな自然が持続するということもありうるだろう。とするなら、わたしたちが見るものすべてが自然といえるかもしれない。アスファルトやコンクリートもまた自然であるというのは、少し行き過ぎかもしれないが、しかしアスファルトの上にでも自然の営みはありうる。逆に、自分の生活の場から遠く離れた山奥に入っていくことは、あまりにも非日常性を演出しすぎることになるかもしれない。おそらく、自然観察にとって重要なことは、自然をふだんとは別の仕方で「見る」（字義通りに見るだけでなく、感じるということ）ということではないかと思う。別の仕方で「見る」ことによって、いつもとは別の自然が現れてくるのではないだろうか。そこに自然の多様なあり方が－例えば人間の環境ということだけではなく、他の生き物にとっての環境でもあるというあり方など－、現れてくる。そうした自然の多様なあり方に気づき、自分と自然環境との関係が、そのようなあり方の一つにすぎないということに気づくことが重要なのではないかと思う。

いずれにしてもこの観察会はまだ始まったばかりであり、今後も継続的に会を開催し、この問題に取り組んでいきたいと思う。

1　詳しくは http://park.expo70.or.jp/facil/facil_14.html